

総合教職実践センターだより

第3号

発行日 2026年10月15日

巻頭言

エッセンシャルワークと AI

総合教職実践センター長 藤井啓之

AI の急速な発展と普及によって、多くの職業が AI に奪われるのではないかという懸念が広がっている。他方、その中でも、エッセンシャルワークは最後まで AI に取って代わられない職業であるとも言われている。エッセンシャルワークとは、人々の日常生活に欠かせない (essential) 分野の労働者であり、医師・看護師、介護福祉士や保育士、教師、警察官や消防士、運送業・物流業者、清掃業者、コンビニ等の販売業従事者などである。

これらの職業がなぜ AI に取って代わられないかの理由は、さまざまあるだろう。しかし、少なくとも、保育士、教師などに関して言えば、さまざまな個性、生育歴、生活背景を持ち、それぞれが意思と能動性を持つ子ども、そしてその多様な子どもたちが相互関係の中で作り上げる複雑な人間関係を指導の対象にするため、マニュアルが通用しないという理由が大きいのではないか。子どもの個性に合わせつつ、そのときどきの子どもの表情を読み、集団のなかでの関係性を分析しながら、適切な働きかけを臨機応変に行わなければならない。教科の授業でも、教室にいる子どもの興味関心などを踏まえながら、授業を構想しなければ、子どもたちそれぞれの思考が相乗効果的に発展するようなよい授業はできない。そのためには、常に情報と状況を分析し、方針を立て、試行錯誤的に働きかける必要があるということだ。

ところが、ここ 1~2 年の大学の様子から、私は、教師は AI に取って代わられるのではないかという懸念を持つようになった。その様子とは、全国の大学で、授業感想や期末レポートの大半が、AI に作成してもらったとしか思えないものに様変わりしているということだ。高校現場でも、推薦入学等での志望動機書で同じような傾向が出ていると聞く。入学から卒業まで、自分の頭で考えず、AI に丸投げするような人に、エッセンシャルワークに必要な素養は身につかないと思わざるを得ない。たとえば、まず自分で書いてから、それを校正するのに AI を使うならまだ理解できる。しかし、実際はそうではないだろう。たとえば、ほとんどのレポートが同じような構成、同じような語句や言い回しを使っていて、学生らしい、不器用だが苦闘して書いた痕跡がまったく見られないからだ。書き手に音読させたら、自分では読めない漢字もあるのではないか。

AI の常用は知的怠惰を招くと言われている。それはそうだ。たとえば、スポーツ選手が、トレーニングを全部 AI で駆動するロボットにさせていたとしよう。いざ本番で自分が試合に出たらどうなるだろう。結果は火を見るより明かだろう。

逆に、毎回の授業感想を、たとえ拙くとも自分の経験を交えながら一生懸命に書くという知的努力を重ねた学生の記述式の期末テストの解答は、ピカールで優れたものとなっていた。

結論として言いたいのは、AI に依存して学生時代を過ごした学生は、考えることを忘れ、知的に怠惰になり、その結果、エッセンシャルワーカーに必要な能力は全く身につかないということだ。仮にうまく就職できても、まともに仕事ができないので仕事が続かないだろう。それなら、AI を組み込んだロボットに教師をしてもらったほうがよいということにもなりかねない。

教職が、(他のエッセンシャルワークでも同様だが、) AI に取って代わられるかどうかは、教師を目指す学生が、知的苦闘を厭わないかどうかにかかっているのかもしれない。



ステップアップ講座に参加して



教育・心理学部 学校教育学科 3 年 N.S

1. 参加しようと思った動機

私が教採ステップアップ講座に参加したきっかけは、友達に参加すると聞き、何となく私も一緒に行ってみようという軽い気持ちで参加したことです。講義を受け、県別の合格率を見たことで、教員採用試験は思っていた以上に難しいものなのだと感じました。4 月までほとんど勉強をしていなかったため、あと 3 か月もしないうちに教採なのかと、とても焦りを感じました。

まずは自分が受験する県の過去問を買い、問題を解き始めました。この講座を受けたことで、自分にはまだまだ勉強が必要だと実感することができ、参加してよかったと思いました。

2. 第 1 次試験合格までの道のり

私はステップアップ講座を受けてから、毎日のように勉強するようになりました。スマートフォンに教採までのカウントダウンを設定し、常に危機感を持つようにしました。

4 月は教職教養や一般教養もよく分からず、過去問を解いてもほとんど間違っていました。このままではまずいと思い、片岡先生や内田先生に相談したり、12 号館 5 階に友達と通ったりして勉強しました。

自分が受験する県だけでなく、他県の過去問にも取り組み、特に赤色の全国まるごと過去問題集を繰り返し解きました。分からない問題は答えを覚え、知識をノートにまとめ、間違えた問題は何度も解き直しました。

電車の中では教採対策アプリを使い、参考書を開けないときはスマホで勉強しました。ChatGPT に問題を出してもらったりなど、とにかくたくさん問題に触れることを意識しました。

3. 第 1 次試験に合格できたのは自分だけの力ではない

合格できた理由の一つには、一緒に勉強してくれた友達が存在があります。友達が頑張っている姿を見て、私も頑張ろうと思うことができました。また、片岡先生や内田先生にも相談に乗っていただいたり、励ましていただいたりしました。たくさんの人に支えてもらったからこそ、最後まで諦めずに頑張ることができたと思っています。

4. 今から教採を受ける人たちに

今から教採の勉強を始める人には、できるだけ早く勉強を始めてほしいです。私は試験まで残り 3 か月ほどになってから本格的に勉強を始めたため、これから受験する人には余裕を持って勉強に取りかかってほしいと思います。一人で勉強することは大変なので、勉強に挫折しそうになったら一度 12 号館 5 階に行ってみてください。親身になってくださる先生方が、自分に合った勉強方法を一緒に考えてくださいます。

自分に負けず、最後まで諦めずに勉強してください。





二次直前対策講座に参加して

経済学部 経済学科4年 Y.Y

今回、東海キャンパスで実施された二次試験対策講座に参加し、多くの学びを得ることができた。特に印象に残った点を3つ述べる。

1つ目は、本番と同じ形式で面接練習ができたことである。愛知県の面接は、15分間の面接を連続して2回行うという特徴的な形式で実施される。私はこれまで、面接中に1度ミスをするとう気持ちを引きずってしまうという課題を抱えており、この短所は愛知県の面接を受けるうえで必ず克服すべき点であると考えていた。今回の講座では、本番同様に2回連続で面接を行うことで、ミスをしてもしっかり気持ちを切り替えて次の面接に臨む練習ができた。その結果、本番に対する不安を軽減することができ、実践的な準備につながった。

2つ目は、その場で迅速にフィードバックをいただけたことである。今回東海キャンパスでは少人数での実施だったこともあり、1回目の練習後すぐに振り返りの時間を設けていただいた。練習とフィードバックが連続して行われたことで、自分の回答を客観的に見直す機会が自然と生まれた。振り返りの場では、回答に詰まってしまった質問に対する先生方の考え方や、まだ軸が定まっていない回答について具体的な回答例を示していただいた。どのような視点で答えを組み立てると説得力が増すのか、面接官がどのような意図で質問しているのかといった背景まで説明していただけたことは非常に参考になった。また、疑問点をその場で解消し、新しい回答をその場で再構築できたため、2回目の練習では1回目のフィードバックをすぐに活かすことができた。この「練習 → フィードバック → 再挑戦」という短いサイクルを繰り返せたことは、面接力を高めるうえで非常に効果的であった。

3つ目は、講座を通して新たな出会いがあり、それが自分の成長につながった点である。今回の講座には経済学部の先生方だけでなく国際学部の先生方も参加してくださり、学部の枠を越えた多様な視点からアドバイスをいただくことができた。特に国際学部の先生方とは、前回を含めこの面接講座が初めての交流であり、講座終了後も個人的にこちらからお願ひして本番まで何度かご指導いただいた。もしこの講座がなければ、国際学部の先生方に面接指導をお願いする機会は無かったと思う。講座をきっかけに新たな人脈が広がり、練習期間中に頼れる存在が増えたことは精神的にも大きな支えとなり、最後まで前向きに準備を進める力になった。こうした出会いと支えがあったからこそ、自分の成長を実感しながら練習に取り組むことができたと感じている。

最後に、この講座を受けるうえで最も大切だと感じたことは、自分から主体的に行動する姿勢である。今回の講座は、多くの先生方から直接アドバイスをいただける貴重な機会であり、その学びを最大限に活かすためには、疑問点を遠慮せずに質問し、自ら積極的に関わりを広げていくことが欠かせないと実感した。こうした主体的な姿勢こそが、面接対策だけでなく、今後教員として歩んでいくうえでも重要な姿勢であると強く感じている。





二次直前対策講座に参加して②

スポーツ科学部 スポーツ科学科4年 F.I

「二次直前対策講座」は私の志望した名古屋市の二次試験の1週間前に行われた。そして、私はこの「二次直前対策講座」に参加し、面接の自信をつけることができたと感じる。

私が面接練習を本格的に始めたのは二次試験の2週間前。いざ、友達や先生方へ面接を教えてもらおうとしたところ、「遅くないか」「間に合う？」と言った声をかけられた。そして、すでに練習を始めて1か月以上たっている学生の面接を見て、現実を目の当たりにした。私は今からでも間に合うのか。合格することはできるのか。焦りと同時に今から人一倍面接練習に時間をかけなければならないと思った事を覚えている。

「二次直前対策講座」は土曜日。過去に面接官を経験したことがある方が来られ、本番さながらに行われるという事を聞いていたため、その日までの5日間で自分自身の型を作っておく必要があった。そして5日間授業や部活、バイト以外の時間は先生方、友達に協力してもらい面接練習をひたすら行った。しかし、時間が足らず、まだまだ、初めに見た1か月以上面接対策を行っている学生の面接には程遠いクオリティーで土曜日の「二次直前対策講座」を迎えた。私の在籍するスポーツ科学部の学生は私含め4人。面接官、学生の人数、時間などからスポーツ科学部の4人が同じ教室で「二次直前対策講座」を受けることとなった。順番は面接官が決めており、順番以外の時間は教室の後ろの席で聞きながら待っているという指示を受けた。私の順番は4番目と言われた。そして、一人目からすぐに「二次直前対策講座」の面接が行われた。普段一緒に講義を受けている学生たちで知っている人達だが、面接の出来に圧倒された。私の面接ではこの友達より面接官から良い印象を受けることができないだろうと思い、ここで面接を上手く行おうと思うのではなく、40分という時間で私を知ってもらおうという考え方に切り替えた。そして、私の番が来た。私は、これまでの面接練習から軸の部分だけを頭に入れ、他の部分はその時頭に浮かんだことをそのまま言葉にしようと心掛けた。結果、自己評価はまずまずで手ごたえを感じ、面接官の一人からは「とても好印象を受けました」という声をかけて頂いた。もちろん言葉に詰まる時もあったが、それ以上に私の事を40分という短い時間でも知ってもらえたと感じられたため、この「二次直前対策講座」ではとても私の自信に繋がった。

そして、私は「二次直前対策講座」から1週間後の教員採用試験において私自身の事を存分に知って頂けるような面接を行う事ができたと感じる。実際の評価は分からないが、結果として、合格通知を受けることができた。「二次直前対策講座」に参加したことは私にとってとても大きなターニングポイントであったため、ぜひ、皆様も「二次直前対策講座」、それ以外の様々な活動、イベントに参加して欲しいと思う。輝く将来に向かって頑張ってください。応援しています。





合格体験記（愛知県・小学校）

教育・心理学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 S.S

私にとって大切だったのは、とにかく早く準備を始めることと、早い段階からどんな教員になりたいのかの軸を見つけることが大切だったと感じています。

一次試験は自分との戦いです。私は三年次に受験を経験し、早めの時期から勉強をスタートしました。愛知県の過去問を何度も解き直して、出題の傾向やクセを掴むことを意識しました。一次試験はやった分だけ確実に自分の力になり、自信へつながっていくと実感しました。二年生の時期から3年次に採用試験を受ける気持ちで準備しておくといいかもしれません。

愛知県の教員採用試験は一次試験の合格率が高めだからこそ、勝負の分け目になるのは二次の個人面接です。面接は一人で練習していても上達しないと思い、積極的に人に見てもらうように練習しました。大学の総合教職実践センターには面接官の経験がある元校長先生が二人いらっしゃったので、何度か通って指導を受けました。面接官の目線から直すべき部分を教えてもらい、回答に重みを持たせる話し方や面接マナーを体で覚えめました。他にも大学で開催されたいくつかの面接対策講座にもすべて参加しました。面接対策講座では、総合教職実践センターの先生以外の面接官経験者の元校長先生から指導をいただくことができます。様々な視点のアドバイスをもらい自分の軸を見つけることができました。

もう一つ役に立ったのが、友人同士での面接練習です。友人との練習で面接官の役をやってみると、「こういう話し方をすると良く見えるんだ」「この答え方は少し分かりづらいな」といったことが客観的に見えてきました。この視点は、自分自身の面接力を上げるためにも活きました。

また教育実習での過ごし方も自分の軸を探すのに重要になってきます。ただ実習をこなすのではなく、「自分は今どんな課題を持っていて、それに対してどう行動したか」を意識して毎日を過ごしました。この経験があったからこそ、面接本番で自分の言葉として具体的に話すことができたと思っています。

たくさん練習したことが、本番での大きな自信になりました。その自信があったからこそ、面接官の前でも堂々とした姿勢で自分を表現することができたと考えています。

まず何から始めたらよいか悩んでいる人は総合教職実践センターに行くことで何から始めればいいのか、自分には何が足りないのかを知るきっかけになると思います。



合格体験記（名古屋市・特別支援学校）

教育・心理学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 T.T

1. 受験に向けて

私は、名古屋市の特別支援学校教員を目指して教員採用試験の勉強に取り組みました。受験勉強では、ただ参考書を読むだけではなく、実際に過去問を解き、自分の苦手な分野を把握して繰り返し復習することを大切にしました。特に教職・一般教養については、名古屋市の過去問を解くことで、どのような内容が出題されるのか、どの分野を重点的に勉強すべきなのかを意識しました。間違えた問題については、そのままにせず、参考書を使って関連する知識まで確認するようにしました。専門教科の勉強では、特別支援学校教諭の過去問題を中心に取り組みました。過去問を何度も解いていると、同じような内容が繰り返し出題されていることにも気づくため、まずは過去問を通して出題傾向をつかむことが重要だと思います。

2. よく使った参考書

私が特によく使用した参考書は、以下の3冊です。

- ☆ 協同教育研究会『2027年度版 名古屋市の教職・一般教養 過去問』（協同出版）
名古屋市の出題傾向を知るために活用しました。実際の過去問を繰り返し解き、自分の得意・不得意を確認しました。
- ☆ 協同教育研究会『2026年度版 全国まるごと過去問題集 特別支援学校教諭』（協同出版）
専門教科の対策として使用しました。特別支援教育に関する幅広い内容を勉強することができ、知識の確認にも役立ちました。
- ☆ 資格の大原『実践問題集 教職教養』（非売品：CDP講座を受講した人に配布されるもの）

教職教養の知識を身につけるために使用しました。問題を解きながら、間違えた部分を参考書などで確認するという使い方をしました。

3. 二次試験対策

二次試験では、面接や場面指導など、実際に人に向かって話す練習をしておくことが大切だと感じました。自分一人で考えるだけでは気づけない話し方の癖や改善点があるため、先生や友人などに協力してもらい、実際の試験を想定した練習をすることをおすすめします。特に場面指導では、単に正しい答えを言うことだけではなく、「教師として子どもにどのように関わるか」を意識して練習しました。

4. 後輩へのメッセージ

教員採用試験は、勉強する範囲が広く、最初は何から始めればよいのか分からないと思います。しかし、最初から全てを完璧にしようとする必要はありません。まず過去問を解いて現在の自分の実力を知り、そこから必要な勉強を積み重ねていくことが大切だと思います。

また、試験直前だけ頑張るのではなく、少しずつでも継続して勉強することをおすすめします。自分を信じて最後まで諦めずに取り組めば、必ず合格につながります。皆さんがそれぞれ目指す自治体・校種の教員として働けることを願っています。



合格体験記（名古屋市・特別支援学校）

スポーツ科学部 スポーツ科学科 4 年 H.K

【受験対策・勉強法について】

私は、大学 2 年生の 1 月から教員採用試験に向けた勉強を始めました。特別支援教育の対策には、協同出版の「全国まるごと過去問題集」「特別支援教育の完全攻略」と「名古屋市の過去問」を使用し、教職教養では、「教職教養の要点理解」「教職教養の演習問題」と「名古屋市の過去問」を中心に取り組みました。

勉強を進める上で最も意識していたことは、短時間でも毎日必ず取り組むことです。忙しい日や疲れている日にも、「5 分だけでも問題に取り組む」と決め、勉強しない日をつくらないようにしました。学習するときは、まず教材を一区切りつくところまで一通り解き、間違えた問題に黄色の付箋を貼りました。その後、付箋の付いた問題を中心にもう一度解き直し、それでも間違えた問題には赤色の付箋を貼りました。赤色の付箋が付いた問題は、自分が特に理解できていない部分であるため、正解できるまで繰り返し取り組みました。このように間違えた問題を目で確認できるようにすることで、苦手な分野を把握し、優先的に復習することができました。

また、勉強へのモチベーションを維持するため、アプリを使って毎日の勉強時間を記録しました。取り組んだ時間が積み重なっていく様子を確認することで達成感が得られ、意欲につながりました。さらに、受験対策を一人で抱え込まないことも大切です。分からない問題は友達と教え合ったり、先生に質問したりして解決しました。面接練習についても、先生から指導を受けるだけでなく、同じ教員採用試験を受験する友達と質問を出し合い、互いに意見を伝えながら練習しました。周囲と協力して取り組むことが、知識を深めるだけでなく、不安の軽減にもつながったと感じています。

【後輩へのメッセージ】

後輩の皆さんに最も伝えたいことは、無理のない方法で学習を継続することの大切さです。初めから長時間の勉強を続けようとする負担が大きくなり、継続することが難しくなります。そのため、忙しい日は少しだけでも取り組むなど、自分の生活に合わせて続けられる目標を設定することが大切です。毎日の小さな積み重ねが、試験前の自信につながると思います。また、受験対策は一人で行うのではなく、同じ教員採用試験を受験する仲間と協力し、互いに助け合ってください。自分では気付かなかった考え方を知ることができ、不安や悩みも共有できます。また、大学で行われる対策講座にも積極的に参加することを勧めます。特に面接練習では、本番に近い緊張感の中で練習でき、先生から具体的な助言をいただけるため、自分の課題を明確にすることができます。勉強方法には人それぞれ合う形があります。周囲の方法を参考にしながら、自分が無理なく続けられ、知識が定着しやすい方法を見つけてください。焦らず一つ一つ積み重ね、仲間と支え合いながら最後まで取り組むことが、良い結果につながると思います。





合格体験記（三重県・高校福祉）

社会福祉学部 社会福祉学科 2025年度卒業 S.K

私は現在、三重県の高等学校で常勤講師として働いてます。講師として働きながら、今夏に三重県の教員採用試験を受験し、合格を頂きました。

本稿では、私が講師として働きながら教員採用試験に向けて取り組んだことについて紹介します。これから教員採用試験を受験する方にとって、少しでも参考になれば幸いです。

1. 1次試験（筆記）

私は大学生の頃は、教員採用試験に向けてあまり勉強をしていませんでした。そのため、今夏三重県で採用があることを知ってから本格的に勉強を始めました。しかし、4月から講師として働き始め、毎日の授業準備や校務、生徒との関わりなどもある中で、仕事が終わってから勉強時間をつくるのは思っていた以上に大変でした。そのため学生のうちからしっかり勉強をしていたら良かったなと感じています。勉強をするタイミングに早いということはないです。できるだけ早いうちから勉強に取り組むことをおすすめします。

2. 2次試験（面接）

1次試験が終わってから2次試験まで、2ヶ月もないです。そのため、面接も早めの対策が必要です。私は面接の練習ではまず質問の想定をしました。そしてひたすら誰かに面接練習をしてもらいました。たくさんの人に練習してもらうのがいいと思います。色んな意見や考えを吸収できると思います。

私が面接で大切にすることは以下の3つです。

- (1) 自分の考えや想いをしっかりと伝えること
- (2) 会話をすること
- (3) 常に笑顔を忘れない

三重県では個人面接で、1人15分もなかったと思います。そんな短時間で自分のことを知ってもらうのは難しいです。質問を想定して練習もしますが、大事なはその時の対応力です。いかに会話をするかだと思います。笑顔で重い空気に負けず、たくさん会話するぐらいの心持ちで大丈夫だと思います。

3. 2次試験（模擬授業）

三重県では、2次試験に模擬授業があります。試験官と他の受験者（2人）の前で模擬授業をします。時間は4分で、とても短いです。私は、授業の内容に入る前の導入で終わりました。授業の内容がどうなのかというよりも、普段どのような雰囲気ですぐに生徒と接しているのか、どんな目的を持って授業を進めているのかを見られていたように感じました。

模擬授業の対策は、1つの授業を作り、授業の流れを考えることと、たくさんの人に授業を見てもらうことです。難しいかもしれませんが、現役の教師の方にも見てもらえると更に良いと思います。



2026年度 教員採用試験を振り返って

総合教職実践センター教採部門長 齋藤一晴

2026年度の教員採用試験は、実施の早期化が定着し、自治体によっては定員を満たすため秋受験を独自に行うなど、教員をどうにかして確保しようとする動きが続いている。なかでも昨年度、「小学校教諭」の合格者の約6割が辞退した高知県では、今年、定員の2倍以上の合格者を出して昨年同様の辞退者続出に備えている。

このように自治体によっては教員の確保が難しいなかで、9月17日のニュースによれば、文部科学省が国公立の小・中・高校などで働く教員を対象に、大学在学中に国から貸与された奨学金の返還を免除することを検討しているという。これは、約30年ぶりに奨学金返還免除制度を復活させるもので、教員不足の解消につなげる狙いがあるとしている。

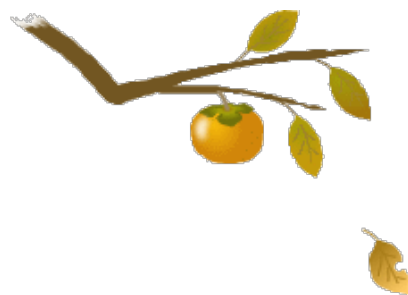
日本の奨学金制度は、「借金制度」ともいえるもので、文科省が検討している奨学金の免除は、借金を抱えた学生たちの足元を見る政策であり、学生の教員になりたいという気持ちとはかけ離れたものだといえる。なぜ教員ばなれが進んでいるのかという実態に目を向けず、根本的な解決策にならない「愚策」だと言わざるを得ない。

上述の通り、自治体によっては教員採用試験を本稿執筆時も継続して実施しており、そのため学生の教員採用試験対策や合否結果も最終的な結果をむかえていない、ということになる。そうした状況で今年度の教員採用試験を振り返ることをあらかじめ述べておきたい。

教員採用試験は、例えば愛知県であれば来年度から「教員採用選考に係る第一次選考の共同実施に関する自治体協議会」において作成された共通問題を活用して実施する予定になっており、これまでの試験の傾向と対策を行える最後の年度ということもあり、3年生のうちに受験、合格しておきたいという心理が働いたようで、3年受験が増加している。また、来年度は試験のハードルがさらに上がるのではと想定して、4年生での受験も対策に迫られたのが実情である。

こうしてみると、学生たちは制度や政策に振り回されてばかりで、教材研究や模擬授業で経験を積み重ねるといったことにじっくり腰を落ち着けて取り組むことが難しくなっているように思う。教員の数は確保されるのかもしれないが、授業ができないのであれば、本末転倒である。

総合教職実践センターは、美浜キャンパス、東海キャンパスを問わず、教職課程を有する各学部、学務部、キャリア開発課、教職課程事務室と連携しながら教採対策を行ってきた。なかでも教員養成アドバイザーの内田幹男先生、片岡和也先生が日常的に筆記試験から小論文、面接練習から場面指導に至るまでの試験科目全体について、学生対応を行った。一人に一つファイルを作成し、受験自治体の試験の傾向と対策を意識しつつ対応内容を記録して継続した対策を行った。9月末時点で採用者の総数は判明していないが、昨年度よりも多くの学生が念願かなって2027年4月から教員として教壇に立つという夢を実現することができたと思われる。今後も、きめ細かい学生対応、試験対策を行っていくことが大切である。





卒業生からのたより①



子ども発達学部 子ども発達学科 2022年度卒業

岐阜県小学校教諭 D.Y

はじめに

私は、2022年3月に卒業し、常勤講師を3年勤め、今年から初任者として勤めています。大学では、松下ゼミに在籍していました。松下ゼミで取り組んだ卒業作品と、大学で学んだことを生かして子どもたちと過ごした学校生活について文章にしたいと思います。

松下ゼミで取り組んだ卒業作品

松下ゼミでは、子どもたちとの創作活動を通して、創作活動が子どもたちに与える影響や表現の素晴らしさについて深く学ぶことができました。卒業作品を作るにあたって、自分にできることは何か考えたときに思いついたのは、「地域の特性と結びつける創作活動」でした。岐阜県的美濃市には「美濃和紙」というものがあります。子どものたちが楽しめて、和紙に触れ合うことができる作品を作りたいと思いました。そこで、子どもが入れるほどのドーム型の木枠を作り、草木染めで染色した和紙を貼ることで、カラフルで大きな和紙のドームを作りました。この作品は、卒業研究発表後、美濃市文化会館に2年ほど展示をさせて頂きました。文化会館に来館した親子が楽しそうに写真を撮り、作品に触れて地域の特産物を感じ合う場面もあり、作品を制作して良かったなと思いました。

教員になって感じたこと

大学卒業後、3年間常勤講師として働き、今年から新規採用職員として働いています。私は、意図的に常勤講師を3年間続けました。理由は、様々な校種・地域特性を知り、多くの先輩教員から学びたかったからです。そのため、常勤講師として働いた3年間は、1年毎で学校を異動しました。どの学校も特徴的で、「僻地複式」・「統合をして校区がとても広い単学級」・「自閉情緒支援学級」と毎年新鮮な教育現場で働くことができました。私がこの3年間で貫き通した信念は、「子ども一人一人の成長のために」でした。子どもたちと関わってきて、同年代でも発達状況には個人差がとてもあります。日常生活や授業の中で全員が「分かった！できる！」と思える指導をするためには、指導者が一人一人の困り感に対応できる支援を知っておかなければいけません。そのために、自分自身で勉強して知識をつけて実践したり、先輩教員から支援方法を学んだりしました。「子ども一人一人の成長のために」私ができることは何かを常に考え、日々学び実践する気持ちを忘れずにこれからも子どもたちと関わりたいと思います。

教員を目指すあなたたちへ

あなたの教員としての「強み」は何かありますか。私が今まで関わってきた先輩教員で多くの学びがあった教員には、その人の「強み」がありました。そのような人には、教員としての魅力があり、子どもたちからもとても好かれています。そんな教員を目指してもらいたいと思います。私は常勤講師の3年間の中で、「通常学級での特別支援教育」を強みにできるように努力しています。通常学級には支援を必要とする子どもがたくさんいます。そのような子たちは、心に大きな不安を抱えており、保護者の方も同様です。そんな家族の支えになれたらいいなと思い、日々努力をしています。

日本福祉大学に通うあなたたちは、特別支援教育を学ぶ機会が多くあると思います。これからの教育現場において、特別支援教育の知識をつけておくことは必須になります。特に、支援方法や支援器具など教員になってから即実践できるようなことを身に付けておくといいでしょう。ぜひ、日福生として、「一人一人の成長に寄り添う教員」を目指して頂きたいです。大学生活を送りながら、教員採用試験の勉強は大変だと思いますが、頑張ってください。

卒業生からのたより②



国際福祉開発学部 国際福祉開発学科 2024年度卒業
愛知県高等学校教諭 Y.Y

1. はじめに

私は2024年度に日本福祉大学を卒業し、翌年度から愛知県の公立高等学校での勤務が始まりました。今年で教員になって2年目ですが、未だに慣れないことばかりで忙しい毎日を送っています。それでも、現場で生徒たちと関わっていく中で、自身も少しずつ成長している実感を持っています。以下、この約1年半で体験したことや感じたことをまとめます。

2. 教員として、人間として成長した1年半

昨年度は第1学年で副担任を受け持ち、同じ学年で英語を教えました。現在、私は再度1年生で副担任をしており、第1学年に加えて第2学年でも英語を教えています。初めのころ、大学で行った模擬授業の経験を活かして授業を展開していました。しかしながら、生徒によって英語への興味や習熟度に大きな差があり、生徒によって反応が全然違います。そのため、クラスによって授業の進め方や指導の仕方を工夫していく必要があります。また、私の学校は英語に苦手意識を持っている生徒が大半を占めています。そのため、どう教えたらわかりやすく伝わるかを考えることも大事ですが、そもそも生徒がどこで躓いているのかを探りながら授業を行っていく必要があります。

そこで私は、生徒の様子や反応を窺いつつ、机間指導をしながらどういうミスが多いかをチェックしてフィードバックを行ったり、複雑な説明を極力省いて簡潔にまとめたりと、生徒が少しでも授業を理解できるように工夫を重ねました。その効果か、全員ではないですが、何人かから「今の説明ですごくわかった」「解けるようになった」という言葉を聞くようになりました。工夫した甲斐があったなと実感し、とてもうれしかったです。英語が苦手な生徒に少しでも成功体験を与えられるよう、日々教材研究を行っています。

また、私は陸上部の主顧問を担当しています。私には陸上競技の知識は一切なく、担当が決まった時には不安しかありませんでした。ところが、部員たちと関わったり、一緒に競技の練習を行ったりする中で、少しずつ陸上競技への理解が深まり、少しずつ知識を身に付けられるようになりました。もちろん部活を見ていると日々の仕事が忙しくなりますが、その分生徒たちと関わる時間が増え、より生徒に対する理解が深まります。現在、部活は縮小傾向にありますが、生徒だけでなく、教師にとっても貴重な時間ではないかと感じています。

3. まとめ

教師として勤め始めて1年半が経過しようとしています。様々なことを経験し、日々成長している実感はありますが、未熟なところや努力が必要なことがたくさんあります。しかし、この職業はとてもやりがいのある仕事であると考えます。将来教師を目指す皆さんは、なぜ教師を目指そうと思ったのか、今一度思い出してみてください。それが、教師になるために最も重要な志です。皆さんが夢を叶えることを心から願っています！



卒業生からのたより③

教育・心理学部 子ども発達学科 2026年卒業
愛知県特別支援学校教諭 M.I

1.はじめに

私は、日本福祉大学を卒業し、今は愛知県の特別支援学校で教員として働いています。社会人一年目で、まだ分からないこともたくさんありますが、毎日子どもたちと楽しく授業をしながら、色々な先生に相談したり助けてもらったりして、少しずつできることを増やしています。うまくいかないこともあります、その度に試行錯誤しながら頑張っています。

2.教員として感じる「やりがい」と「おもしろさ」

特別支援学校では、子どもの特性に合わせて教材を工夫することが大切だと感じています。子どもの様子をよく観察して、「どうしたら分かりやすくなるだろう」などと考えながら、教材を作っています。日々、子どもたちと楽しく授業をする中で、子どもたちの小さな成長を見つけられることが、とても嬉しいです。

先日、子どもの特性に合わせて作った教材を授業で使ったところ、子どもが意欲的に授業に参加し、いつもより集中している姿が見られました。そのとき、教材づくりの面白さと、教員としてのやりがいを強く感じました。

3.大学での学び

大学で学んだことは、今の仕事の中でとても役に立っています。授業で学んだ特別支援教育の知識や、教育実習で子どもたちと関わった経験が、子どもの様子を理解したり、支援の方法を考えたりするときの助けになっています。また、大学時代に出会った友達の存在も大きいです。同じことを学んだ友達と話す、仕事で悩んだときに気持ちが軽くなったり、新しい考え方をもらえたりします。今でも、連絡を取り合い、お互い励まし合えることがとても心強いです。大学での学びや、友達との繋がりが今の自分を支えてくれていると感じています。

4.おわりに

社会人になってまだ数か月ですが、分からないことや悩むことは本当にたくさんあります。その中で強く感じているのは、一人で抱え込まず、周りの人に相談することの大切さです。周りの先生方に話を聞いてもらうことで、気持ちが楽になったり、新しい考え方をもらえたりして、少しずつ前に進むことができます。皆さんも、困った時は一人で抱え込まずに、周りの人に気軽に相談してみてください！話すだけで気持ちが楽になることもあります！私は、これからも、一人で悩みを抱え込まずに周りの先生方に頼りながら、自分らしく成長していきたいと思っています！





教育実習体験報告

スポーツ科学部 スポーツ科学科 4年 Y.S

1. 教育実習を振り返って学んだこと

私は、保健体育科の免許状を取得するために3週間、公立の中学校で教育実習をさせていただきました。母校ではなかったため、教育実習が始まる前に、実習校の校則や場所などの情報を収集するための準備を行っていききました。そして、教育実習が始まり、配属クラスでどう生徒と関わっていくかを考えながら、教材研究を進めていききました。私は、持ち前の明るさを発揮しながら生徒とかかわっていったことで、1週目で配属クラスの生徒と関係性を築くことができました。生徒とコミュニケーションを積極的にとり、関係性を築けたことで、授業実習や研究授業を良い雰囲気で行うことができました。そのため、緊張することなく、「自分らしさ」を発揮した授業をすることができました。教育実習を振り返って、単に教材研究を進めるだけでなく、生徒との対話を重ねていくことも大切であることを学びました。生徒から「この先生なら発言したい」「面白いから参加したい」などの意欲的で前向きな反応を引き出すことができ、価値のある実習だったと振り返ることができました。

2. 教育実習を振り返って改善したこと

教育実習を振り返って、課題点や失敗は多々ありました。例えば、学習指導案の書き方や生徒の動かし方、指示の出し方、教師の立ち位置などたくさんの課題点が見つかりました。特に、生徒の動かし方に私は、苦戦しました。体育の授業では、教室より広い空間で授業をするため、指示の通りにくさや、生徒をどう動かすかを瞬時に判断しなければならなかったため、失敗が多く残ってしまいました。それらの失敗を改善するために、指導案通りに動こうとはせず、臨機応変に動くことを意識して、全体に指示が通るような声量や、生徒にメリハリを持たせるための言葉がけを行うことで全体を動かせるように改善することができました。また、体育ではケガや体調不良などによる安全面の配慮を意識して授業を進めることが不可欠であるため、事前に体育館や運動場の環境を確認することや、生徒の体調を授業開始と終わりで必ず確認することも必要不可欠であり、責任を持って授業を行うことを意識して、授業の改善を重ねながら行いました。失敗を経験し、改善できたことで、体育の大切さや面白さに改めて気づくことができました。

3. 教育実習を振り返って伝えたいこと

私が伝えたいことは、教育実習は「一生懸命やる」、この一言に尽きます。何事も「一生懸命」取り組めば、生徒や教職員と信頼関係を築けます。生徒や教職員を味方にすれば、教育実習が良い実習だったと振り返ることができます。「上手くこなす」や「周りに迷惑かけないように」などは考えない方がいいです。「一生懸命さ」を存分に出せば、生徒や先生方は自然と声をかけてくれます。私も一生懸命向き合ったからこそ、生徒や先生方と関係性を築くことができました。「一生懸命」に取り組むことで、生徒や周囲の見え方が変わっていくと思います。教育実習でたくさんの経験を積んで、将来に活かしていってください。



教育実習体験報告②

社会福祉学部 社会福祉学科 4年 M.Y

私は母校の名古屋市立の高校で2週間の教育実習を行いました。実習中の授業では、これまで大学で行ってきた模擬授業や出前授業とは異なり、用意してきた授業を行うのみでなく、約2週間の間で生徒との信頼関係を築き、生徒理解を深めながら授業にも活かしていくことが特に新鮮に感じました。社会福祉学部企画の出前授業でも生徒の前で話すという経験はできますが、私も生徒もお互いを知っている関係の中で授業を行うことで、出前授業とは異なる気づきや学びを得ることができたため、貴重な経験だったと感じました。

実習を通して最も大きな学びとなったのは、「生徒との対話の重要性」です。ただ教科書の内容を淡々と教えたり、授業の内容を完璧に教えたりすることを意識するのではなく、どのように工夫をすれば生徒が授業に興味を持ち、内容を理解しやすくなるのかを、生徒の立場に立って考えることが重要だと実習を通して改めて学びました。

実習前半の授業では、生徒が参加できる授業にしよう意識してはいたものの、「わかりやすく伝えなければ」という意識ばかりが強く、生徒に質問することもできなかったはずの場面でもすべて自分で説明してしまい、結果として、生徒が受動的に話を聞くだけの授業になってしまいました。私自身この進め方ではダメだと思い立ち、他の先生の授業をたくさん見学させていただいて、生徒との関わり方を参考にさせていただきました。その学びを活かして、実習後半の授業では、私が実際にアルバイトのヘルパー活動で体験した話を取り入れてみたり、生徒に問いかけてみて、生徒の反応から授業の話に関連させてみたりして、先生方からいただいたアドバイスも活かしながら授業での生徒の関心・理解を深められる工夫をしていました。結果、生徒が楽しくかつ興味を持ち、理解がしやすい授業を行うためには、教員の事前準備や生徒理解、生徒の質問への臨機応変な対応力を鍛える必要があると実習を通して学びました。

また、教育実習を通して、授業だけでなくHRクラスや委員会活動、部活動の顧問の業務も兼任して働く大変さを学びました。教育実習生というあまり授業や業務を受け持っていない立場でも、STや授業見学、教材研究や実習授業を行っているうちに一日が終わってしまい、授業後に実習記録の記入と教材研究を行っているうちに部活動の時間がいつの間にか終わってしまい、部活動に顔を出すことができずに終わってしまう毎日でした。しかし、授業以外の活動で、生徒が一生懸命取り組んでいる姿を見ると、私も頑張ろうと思えたため、生徒たちの貴重な成長の姿を近くで見守ることができる教員という仕事はとてもやりがいがあるものなのだろうと感じました。

教育実習の経験を通して、自分自身が大きく成長するきっかけになったと感じています。指導をしてくださった先生方や生徒の皆さんへの感謝を忘れずに、今後の進路でもこの経験を活かしていきたいです。





学童クラブの子ども達みんなで、算数工作を楽しもう！

美浜町児童クラブ（奥田地区・河和地区）で算数工作教室

研修・連携部門長 板垣賢二

センターの地域連携事業の一環として、美浜町児童クラブの子ども達と「算数工作教室」を企画し、おもしろくてためになる算数数学に関わるモノ作りを楽しんでいます

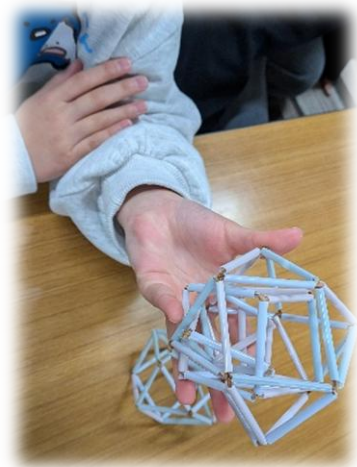
2025 年は奥田児童クラブと河和児童クラブでそれぞれ 3 回ずつ、合計 6 回実施しました。「四角形敷き詰めパズル」「メビウスの輪で遊ぼう」「ストローで作る多面体」など、子ども達みんなで作ったり遊んだりしました。センターからは教員 1 名と学生ボランティア数名が指導員として参加しています。



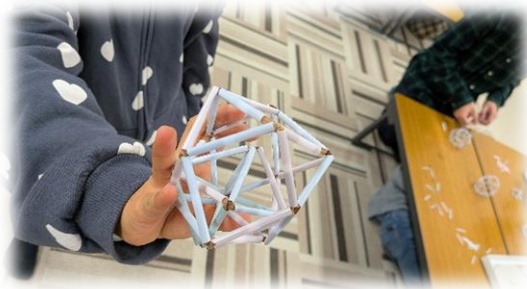
「ストローで作る多面体」では、同じ長さに切ったストローを針金で連結して、様々な立体を作りました。比較的簡単な正 4 面体から始まり、次第に面の数を増やし、正 6 面体（立方体）、正 8 面体、立方 8 面体、正 20 面体などを子ども達が次々に作り上げ

ていきました。

子ども達はお互いに見せ合ったり話し合ったりしながら、学生や教員が一つ一つ説明しなくても、自分たちで同じ長さのストローを組み合わせる工夫し、複雑な多面体を作り上げていきます。普段はなかなか集中して取り組むことができない子どもが熱心に作る姿を見て、児童クラブの指導員の先生も感心されていました。



美浜町と連携した児童クラブでの「算数工作教室」は今年で 3 年目を迎えます。難しい



のは 1 年生から 6 年生まで一緒に活動できる内容にするところですが、いざ始めると異年齢の子ども達が協力して教え合ったりしながら作る姿も見られ、放課後の児童クラブの良さが生かされていると感じます。次回は「ユニット折り紙多面体」で遊ぶ予定です。

